

凝固能の指標として thrombin-antithrombin III complex (TAT) の検討では、不安定狭心症 (UAP) および急性心筋梗塞症 (AMI) は安定狭心症 (SAP) に比し明らかに凝固亢進状態にあった。UAP 中、TAT 値が高値を示した例は、冠拡張薬に抵抗する症例が多く、このような症例には抗凝固薬併用の適応を考慮すべきと考えられた。また、AMI に対する線溶療法は、線溶薬投与により plasmin 生成の増加、および plasminogen activator inhibitor-1 の減少、また D-dimer の増加から線溶亢進に伴う血栓溶解の存在が示唆された。線溶療法の問題点の出血性合併症についても述べる。

#### 4. 産婦人科領域における血栓症—抗リン脂質抗体症候群を中心として—

(第二病院産婦人科)

安達知子

抗リン脂質抗体 (antiphospholipid antibodies: APA) は血栓症のリスク因子として知られているが、現在産婦人科領域では反復流死産の原因の1つとなることが知られており、このほか、初期流産、胎児発育障害、重症妊娠中毒症、子宮内膜症、産褥または手術後下肢深部静脈血栓症などとの関係が報告されている。本シンポジウムでは、APA の測定法、抗リン脂質抗体症候群の概念、APA の産婦人科領域における意義、特に習慣流産と妊娠中毒症について、APA の陽性率、臨床経過の特徴、血液凝固線容因子の変動、胎盤所見の特異性を当科の症例を中心に提示する。また、これらの発症機序について、APA 陽性婦人の血清 IgG を用いた血管内皮細胞および胎盤絨毛細胞を用いた基礎的検討により、APA 陽性者における易血栓形成環境を示し、最後に APA 陽性婦人の当科における抗凝固療法を中心とした産婦人科的管理について述べる。

#### 5. 糖尿病と血栓症—糖尿病性足壊疽を中心として

(糖尿病センター)

中谷文夫

糖尿病者は老化現象と長期高血糖を主とする各種代謝障害による全身的な血管障害がみられる。大別して比較的大きな血管を障害する macroangiopathy と、糖尿病に特徴的とされる微小血管障害としての microangiopathy があり、糖尿病者の足はこの両者の混在がみられ、動脈硬化性下肢閉塞症 (ASO) の出現頻度が高い。ASO 合併例は、血管閉塞しやすくまた種々の疾患を併発し、生命予後の一因子とされている。ASO を合併する糖尿病例42名 (男32, 女10) に関し、

臨床的背景および血液学的検討を行い、治療を行った。糖尿病罹病期間 8~33年 (平均18年) で、合併症は神経障害全例、網膜症34名、腎障害20名、高血圧14名、虚血性心疾患 5名、脳血管障害 1名、高脂血症 2名で、壊疽を含めた潰瘍は12名にみられた。血液学的検査では、凝固能および線溶能異常例が多くみられた。これらの症例に対し抗トロンピン剤を使用しその有用性をみると、自覚および他覚症状の改善が各々69%、85%を示し、潰瘍改善は33%にみられた。血液学的には線溶系の改善がみられ微小循環障害の改善および血栓防止が得られた。また壊疽例で足切断にいたった症例の解剖をみると、壊疽部分ではほとんどに完全閉塞がみられ、壊疽周辺部では高度狭窄が高率にみられた。切断端部の比較的健常と思われる部位での動脈硬化の程度が全例強く、高度狭窄例が高率であった。血管は内膜障害のみならず、足の単純レ線検査でメンケベルグ型中膜石灰化症が高度にみられた。血液透析例での壊疽例は血栓の連続的進行を思わせる病態を示し、足趾の小外傷よりの血管閉塞が高率にみられ、治療効果がみられなかった。他に足趾の微小血栓を示した blue toe 症候群 6名、急性完全閉塞例 1名を経験した。ASO 症例は血栓形成の可能性があるため予防的治療が必要である。

#### 6. 血栓症の画像診断—最近の進歩—

(放射線医学)

成松明子

動脈血栓症の診断には、非侵襲的検査法として造影 CT や MRI (MRA) があるが、治療方針の決定のためには血管造影が必要であり、引き続き interventional radiology として経カテーテル的に血栓溶解術や血栓除去術が施行されることが多い。診断および治療の対象となる動脈は、動脈硬化が主な原因とされる冠状動脈、肺動脈、骨盤~下肢動脈が多く、稀に上腸間膜動脈血栓症がみられる。静脈では、静脈洞血栓症や下肢の深部静脈血栓症が診断の対象となるが、後者に対しては下肢静脈造影が施行され、血栓溶解療法の外に肺血栓塞栓症の予防のための下大静脈フィルターの留置も行われる。近年、<sup>111</sup>In 標識血小板を用いた血栓シンチグラフィも一部で施行されており、特に新鮮な血栓の診断に有効であるといわれている。今回、各々の診断の modality の有用性と限界、および血栓症に対する interventional radiology の最近の進歩について述べる。